



ガバナー・コラム **ロータリーの誤解・正解** シリーズ〈第10回〉

第10回 奉仕は他者のため？ 自分のため？ —究極の利他主義としての「奉仕の理念」—

ガバナー 本田 博己

私たちロータリアンは、なぜロータリークラブにいそいそと集うのでしょうか。多忙な職業人である私たちは、なぜ自分の時間を割いてまで、熱心に奉仕の実践に取り組むのでしょうか。経済合理性を追求すべき組織のリーダーである私たちは、なぜ自己の利益より他者への奉仕を優先する「奉仕の理念」という「理想」を信奉し実践するのでしょうか。

昔から一般の人々のロータリーやロータリアンに対するイメージは変わっていないようです。1919年、ロータリーの創始者ポール・ハリスに取材した新聞記者が記事でこう書いています。「彼（ポール・ハリス）が組織したのは奇妙な団体で、会員はその団体から何も得ないどころか、善を行うという特権を手にするために会費を払うのである」（“Huston Chronicle” 1919）

社会に何か良いことをしようとしている奇特な人々のようだが、よく理解できない団体だ、という認識です。こうしたロータリーに対する世間の見方は、残念ながら現代に至ってもそれほど変わっていません。

それどころか、ロータリアンの中にも、「奉仕の理念」は素晴らしい理念だが非現実的な「理想」にすぎないとか、「四つのテスト」どおりにやっていたら仕事にならない（実際の仕事にそのままでは適用できない厳格すぎる規則だ）、などと主張する人がいます。果たしてロータリーの「奉仕の理念」や「四つのテスト」はお題目だけの理想論にすぎないのでしょうか？

本連載の第7回（1月号）で、ロータリー理念やロータリー運動の本質・価値は、二元論的な思考では捉えられない、と申しました。また、振り返ってみますと、第2回（8月号）で「奉仕の理念」を論じたときには、『奉仕の理念』は、決して利益を求めて奉仕するという功利主義的な思想ではなく、他者のために尽くすことが自らの幸せ（喜び）であるという、他者に奉仕すること自体を目的とする利他主義の思想です。究極の『奉仕の理念』とは、利己と利他の矛盾などない、利己と利他が完全に一致する状態だといえるでしょう。」と早くも口走っています。思えばこのことを私なりに「論証」し、皆様にも得心していただくために、これまで紙数を費やしてきたような気がします。

「トレードオフ」(trade off) という言葉を第7回（1月号）でご紹介しました。一般に「同時には成立しない二律背反の関係」（『広辞苑』岩波書店）という意味ですが、「サービス（奉仕）」と「利益」や「利己」と「利他」とがトレードオフの関係にあるという考えにとどまっている限り、ロータリーの「奉仕の理念」は理解できません。

利己と利他をめぐる議論は古今東西尽きません。日本では、最澄さんの言葉と言われている「忘



己利他」や「自利とは利他をいう」など、仏教の教えの中に、人間の利他的行動に関する深い洞察を見ることができます。近年、「実験社会心理学」「人間行動進化学」「進化倫理学」など学問の分野でも、なぜ人は時に自分を犠牲にしてまで利他的行動をとるのか、という問いに応えようとする試みがあります。

進化倫理学の立場から、利他的行動は、結局人間が本来持っている「利己性」に起因すると主張する学者もいます。「個々の生物は、自分が生存・繁殖する上で利益になる性質を進化させており、『利己性』は、生物一般の基本的性質である。」「他者への利他行動は、将来、周囲の不特定の人たちから『見返り』を得るための『投資』であり、「道徳や正義は、利益に向けて生き、利益のために社会生活をする人間という生物にとって、その利益を得るために必然的に尊重すべき『生の指針』なのである。」というのです。（『進化倫理学入門—「利己的」なのが結局、正しい』内藤淳 光文社新書）「情けは人のためならず」というわけです。

一方、最近の脳研究で「私たちには、他者に対して親切にふるまうという、そのこと自体を報酬（快）と感じる仕組みがある」という報告もあるそうです。（『利他学』小田亮 新潮社）

アメリカの心理学者のアブラハム・H. マスロー（1908 - 1970）が1950年代に提唱した「欲求5段階説」（本人は有名な5段階のピラミッド図は示していない。5段階説は実証性に欠けるという批判もある）の最高段階が「自己実現」です。個人主義的な概念と誤解されやすい「自己実現」について、マスローはこう言っています。

「自己実現の水準では、多くの二分法は解決され、対立概念は結合される」。「自己実現する人は、利己主義と無私の態度とが、一層高次の上位単一体のうちに融合する傾向が強い」。「自己実現をする人は、愛他的、献身的で、自己超越的、社会的である」。「人間の成熟の高い水準にあつては、多くの二分法、両極性、葛藤は融合し、超越し、解決される。自己実現する人間は、利己的であると同時に、利己的でない」。（『完全なる人間』上田吉一訳 誠信書房）

マスローは、自分の枠を越えた目的、対象に向かうこと、己と他人の「二項対立」がないことが、究極の到達すべき人間のあり方であると言っているのです。

さて、ロータリーの「奉仕の理念」の意義は、“Service Above Self”と“He Profits Most Who Serves Best”という二つのモットーを一体化して捉えることによって了解されると申しました（第2回、8月号）。アーサー・F・シェルドンの『ロータリーの哲学』（1921）でも、「決議23-34」（1923）でも、この二つのモットーが一体の形で、ロータリー哲学である「奉仕の理念」が示されています。

2010年規定審議会では、『社会奉仕に関する1923年の声明』の第一項を、奉仕の哲学の定義として使用することを検討するようRI理事会に要請する件（決議案10-182 釧路北RC提案）が444対66の圧倒的多数で採択されました。第1項には次のようにあります。

「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う



他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—“超我の奉仕”の哲学であり、これは“最もよく奉仕する者、最も多く報いられる”という実践的な倫理原則に基づいている。」

この時代（1920年代）のロータリアンの認識では、まだ利己と利他は対立・矛盾・葛藤の関係にあったのかも知れません。利己と利他の矛盾を和らげ、バランスをとる人生哲学が「奉仕の理念」であったのかも知れません。シエルドンが“Service”と“Profit”の関係を、「原因と結果の科学」として、ことさらに「科学」を強調したのは、“Service”と“Profit”とが、トレードオフの関係にあると思われていた時代の風潮に対する「防衛反応」だったのかも知れません。シエルドンの墓碑銘には「ビジネス・サイエンティスト」という肩書が刻まれています。

科学は、現代においても人間の利他行動の理由を合理的・科学的に説明したり、解釈したりすることはできますが、それで「利他」をすっかり認識できたとは言えません。認識するとは、自らの内にその本質的意味を体感し得心するということです。マスローの「自己実現的人間は自己超越に達する」と言う言説も、心理学者としての科学的見解というより、曰く言い難いマスローの哲学的直観に基づくものだと思います。

ロータリーの「奉仕の理念」が、利己と利他の矛盾・葛藤を和らげる人生哲学から、利己と利他が完全に融合された究極の利他主義にまで達することができたのはなぜでしょうか。

ロータリーは決して宗教ではありませんが、参加すること、行動すること、実践することで、ある種の「啓示」や「悟り」の瞬間が訪れることがあります。田中作次 RI 直前会長が提示した「ロータリーモメント」（ロータリーの感動体験）もそういう瞬間を表現したものと言えるでしょう。

ロータリー 100 年の歴史の中で、奉仕する喜びを体感した数多のロータリアンがいます。彼らの味わった奉仕することで得られた充実感、自己成長感、自己実現感が、「奉仕の理念」の意味を磨き深めていったのです。数多のロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって、「奉仕の理念」という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ（喜び）になるという究極の利他主義にまで成長していったといえるのではないのでしょうか。

ロータリーに積極的に参加し、熱心に実践するロータリアンにとって、義務と遊び、利己心と利他心、野心と無私無欲とは融合して一つのものになります。奉仕は他者のためでもあり、自分のためでもあるのは自明なことなのです。